

# 大学生を対象としたケースメソッド教育の評価 —積極的・消極的参加者を対象としたグループインタビュー調査—

岡田加奈子<sup>1)</sup> 三村由香里<sup>2)</sup> 竹鼻ゆかり<sup>3)</sup>  
松枝睦美<sup>2)</sup> 林 照子<sup>4)</sup>

<sup>1)</sup>千葉大学, 教育学部

<sup>2)</sup>岡山大学大学院, 教育学研究科

<sup>3)</sup>東京学芸大学, 芸術スポーツ科学系

<sup>4)</sup>甲南女子大学, 看護リハビリテーション学部

## Evaluation of the Case Method Education for University Students —Group Interviews for Active and Negative participations—

OKADA Kanako<sup>1)</sup> MIMURA Yukari<sup>2)</sup> TAKEHANA Yukari<sup>3)</sup>  
MATSUEDA Mutsumi<sup>2)</sup> HAYASHI Teruko<sup>4)</sup>

<sup>1)</sup>Faculty of Education, Chiba University, Japan

<sup>2)</sup>Graduate School of Education, Okayama University, Japan

<sup>3)</sup>Faculty of Education, Tokyo Gakugei University, Japan

<sup>4)</sup>Faculty of Nursing and Rehabilitation, Konan Women's University, Japan

ケースメソッド教育とは、参加者が判断や対処を求められる模擬ケースを教材に、討論しながら当事者の立場に立って、問題点を見抜き、自分ならばどのように行動すべきかを判断できるようになることを目的とする参加型、問題解決型の総合的実践能力の基礎を養う学習方法である。そこで、本研究の目的は、ケースメソッド教育を評価するための一手法として、参加者の中で、参加に積極的であった者と参加が消極的であった者の両方にグループ・インタビューを、教育直後に行うことにより、両者（参加に積極的であった者と消極的であった者）の学びや参加の困難点等を明らかにすることを目的とする。ケースメソッド教育は90分で、4大学109名を対象に行い、その後本研究の対象者、参加に積極的であった者と消極的であった者全27名を、抽出して、グループインタビュー調査を行った。

その結果、消極的参加者も多く学びがあることが明らかになった。一方、事前学習が十分に行われていないことが、消極的参加に影響を与えていることが示唆された。

Abstract: Case method education is a learning style that is used to form a basis of comprehensive, hands-on and problem-solving ability, in which the participants discuss teaching such materials of simulated cases, with the requirement that they be judged and deal with the material by themselves, so that they can consider how they should behave in similar circumstances. The objectives of this study are evaluation of the case method education for active and negative participations of university students by group interviews.

Method: 90 minutes case method education was conducted for 109 Yogo teacher students in 4 universities.

We also conducted interview research with some of the participants selected from 4 universities of the education groups after they experienced case method education.

Results and Discussions: As a result, it became clear that even negative participants can also learn a lot from this method. However, it was also suggested that where prior study is not fully carried out, this has an effect on negative participation.

キーワード：ケースメソッド教育 (Case method education) 積極的参加 (Active participation)

消極的参加 (Negative participation) インタビュー (Interview) 大学生 (University student)

### I. はじめに

ケースメソッド教育とは、参加者が判断や対処を求められる模擬ケース（事例）を教材に、討論しながら当事者の立場に立って、問題点を見抜き、自分ならばどのように行動すべきかを判断できるようになることを目的と

する参加型、問題解決型の総合的実践能力の基礎を養う学習方法である<sup>1)</sup>。討論形式をとるケースメソッドは、教育者が知識を与えたり講義をしたりするのではなく討論の進行役となる点、「ケース」を教材として扱う点で、伝統的教育方法である講義形式と著しく異なる。そのため、ケースメソッド教育は、同じような状況になったときに対処できる総合的な実践能力を学ぶために教員研修ならびに教員養成において、有用な教育方法であるとも

連絡先著者：岡田加奈子

いえる。

事例を用いる教育方法としては、事例検討がよく用いられる。しかしながら、事例検討の場合、その目的が対象となる事例の解決や評価であるため、その事例を通じて何らかの学習することはあっても、提供される事例の内容、参加者やスーパーバイザーの質によって、その学習の質の程度は様々である。また、教員養成において用いられる事例紹介の場合は、具体的なイメージをもって学習するという点では有効であるが、自分が類似事例に出合った場合のアセスメント能力、対応力を養成するというまでには至らない。

そこで著者らは、ケースメソッド教育を教員研修や教員養成に導入するために、研究を行ってきた<sup>2-8)</sup>。ケースメソッド教育の目的は、単に知識や態度の形成にとどまらず、将来起こりうる事象に対してよりよい準備ができる総合的な実践能力の基礎が培われること、つまり、ケースに対して抽象的な把握から、より具体的なとらえ方のバリエーションが増え、より多くの問題点や対応が想定できることが重要となる。

しかしながら、ケースメソッド教育は参加者の満足度は高いものの<sup>3)</sup>、本当に、問題点や対応策が幅広く想定できているかの評価は非常に難しかった。

そこで、本研究の第1報<sup>9)</sup>においては、それらを評価する一方法として、ケースメソッド教育に用いる“教育用ケース”と同様の学習目的を内在させた“調査用ケース”を開発し、そのケースを教育前と後に質的に分析するケース分析調査を導入した。さらに、講義を実施する群にも同様の調査を行う準実験デザインを用いた結果、「ケースの問題点」、「対応」に関する多くのカテゴリーで具体的記述数が講義群に比べ、ケースメソッド教育群で教育後に増加していることが明らかになった<sup>9)</sup>。

しかしながら、ケースメソッド教育は討論形式をとるため、積極的に参加する者とそうでない者が生じてしまう傾向にあることも大きな課題である。それらの両者の学びはどのように異なり、参加の困難点は何なのであるか。

そこで本報告では、ケースメソッド教育を評価するための一手法として、参加者の中で、参加に積極的であった者と従来調査が難しいとされていた参加が消極的であった者の両方にグループ・インタビューを、教育直後に行うことにより、参加者（参加に積極的であった者と消極的であった者）両者の学びや参加の困難点等を明らかにすることを目的とする。

## II. 方 法

### 1. 調 査

#### 1) 対象ならびに時期

ケースメソッド教育を受けた者は、養護教諭免許状を取得することを目指している大学2年生で、4大学で全109名（ケースメソッド教育群）であった。そのうちケースメソッド教育の全体討論において活発に発言していた学生（以下、積極群とする）とあまり発言していない学生（以下、消極群とする）を各大学5名以下抽出し、ケースメソッド教育直後に、グループインタビュー調査を实

施した。ただし、1校は消極群がいなかったため、インタビュー調査対象者は、積極群4校15名、消極群3校12名 計27名であった。また、本報告の対象ではないがケースメソッド教育ではなく、講義を受講した講義群4大学104名もいた。

調査ならびに授業は、2009年10月～2010年2月に実施した。

#### 2) 調査方法

ケースメソッド授業の直後に各大学において積極群・消極群別に、グループ・インタビューを30～60分で行った。質問項目は、ケースメソッド授業を受講しての良かった点と困難点、ケースに対する事前学習等についてである。インタビュアーは5名（のべ7名）で、事前に実施方法の打ち合わせを行い、マニュアルに沿って行った。発言内容は参加者に口頭と書面での同意を得た上で録音し、逐語に近い形で文章化した。

#### 3) 分析方法

調査の分析にあたっては、発言された内容をなるべく活かす形でコード化し、〈カテゴリー〉、[サブカテゴリー]として分析した。

## 2. 教育・調査の全体プロセス

本研究全体の教育と調査の流れを図1に示した。ケースメソッド教育群・講義群ともにまず、“教育用ケース（前半A）”と“ワークシート”を学生に配布し、【事前学習】を促した。配布した“ワークシート”には、「ケースの中にある問題点（以下、ケースの問題点とする）」と「行うべき対応（以下、対応とする）」について記入するように指示がされていた。

1～2週間後に、教育用ケースと同様のテーマと学習ポイントが盛り込まれている“調査用ケース”を読んで「ケースの問題点」と「行うべき対応」について記述する【事前調査】を集合調査法で行った。

【事前調査】の1～3週間後にケースメソッド教育群は、ケースメソッド教育方法による授業を、講義群は、学校におけるインフルエンザ発症と対応に関する講義を行った。両群とも教育は、1回90分であり、群内の内容をできるだけそろえるために、授業者は事前に十分な打ち合わせを行い、教育群はティーチングノート、講義群は、マニュアルに沿ってかつ、同一の資料で実施した。

ケースメソッド教育群が使用する“教育用ケース”は、一つのストーリーが前半（A）と後半（B）に分かれているケースである。実際のケースメソッド教育では、“教育用ケース（前半A）”に対するグループ討論、そして、全体討論を行った。続いて“教育用ケース（前半B）”を配布し、自分で考えた上で、全体討論を再度行うといった流れで行った。教員はディスカッションを導く司会の役割にあった。

また、ケースメソッド教育群に対しては、教育直後に我々が開発し、さらに改訂した評価票を用いて<sup>10)</sup>【直後調査】を行った。項目は、養護教諭の志望の有無、参加者の満足度、ケースメソッドに関する評価の10項目と自由に意見・感想を求める自由記述であった。その後本調査の対象者を抽出し、グループ・インタビュー調査を行った。本報告では、このうちのグループ・インタ

## 大学生を対象としたケースメソッド教育の評価

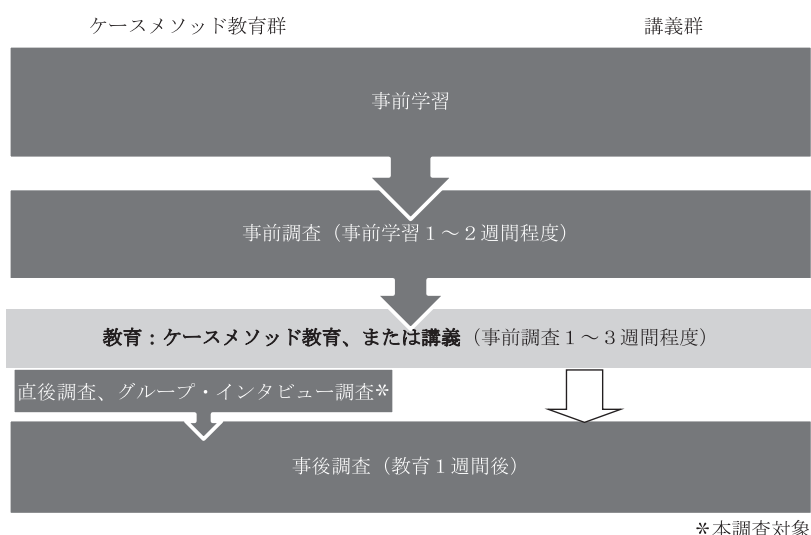


図1 教育と調査のプロセス

表1 ケースメソッド授業用ケース (一部抜粋)

2月1日水曜日、午前8:30に東京駅団体集合場所に集合することから修学旅行がスタートした。団体集合場所には修学旅行を楽しみに興奮気味の生徒が次々に集合してきた。集合時間間際に、マスクをした一人の女子生徒が母親と一緒にきて、母親が「昨夕から風邪の症状があり、かかりつけ医で診察を受けた。インフルエンザの検査もしたがインフルエンザではないと言われた。風邪の薬と熱が出た時のための解熱剤をもらってある。現在は熱がないし、本人はどうしても行きたいといっているのでお願いします。」と担任の金田に伝えた。彼女は、普段から元気でクラスでも副クラス長の田中由美であった。金田も、彼女が経済的な理由で参加が危ぶまれていたが、参加できることになり、とても喜んでスキーの班長や部屋長を率先して引き受けていたことを知っていたので、集合してきたことにホッとしていた。友人たちも駆け寄ってきて、彼女を取り囲んでいた。

ビュー調査の結果について報告する。

最後に、教育1週間後に【事後調査】を両群に【事前調査】と同様の内容方法で行った。

### 3. モデル教材 (教育用ケース、ティーチング・ノート)<sup>10)</sup>

モデル教材は、教育用ケース (前半Aと前半Bの2部構成) とティーチング・ノートから成り立っており、教育に先駆けて開発を行った。ケースは、現代的課題の中でも、2009年に最も緊急の課題であったインフルエンザをテーマとした。ケースは、研究者ならびに養護教諭が検討と試行を繰り返して開発した。ケースには、共通した学ぶべき目標や、おさえるべき観点が含まれており、教育用ケースについては、教育者用のティーチング・ノートにそれらが、示されている。このティーチング・ノートにより、4大学で実施されたケースメソッド教育が同じ目標、抑えるべき観点を踏まえて実施することが可能となった。教育用ケースの一部を表1に示した。

### 4. 倫理的配慮

本研究を行うに当たっては、事前に参加者に研究の目的やプライバシーの保護等を説明し、自由意思で拒否できることを伝えた上で、同意した者を対象者とした。

## Ⅲ. 結 果

### 1. ケースメソッド教育参加による肯定的意見

教育直後に行ったグループ・インタビューにより得られた意見を分析した結果、ケースメソッド教育参加による肯定的意見に関しては、〈討論の楽しさ〉〈ケースメソッド教育による学び〉〈ケースメソッド教育の方法論〉〈今後のケースメソッド教育への希望・期待〉の4つの〈カテゴリー〉が抽出された (表2)。

〈討論の楽しさ〉は積極群 (ケースメソッド教育の全体討論において活発に発言していた学生) も消極群 (あまり発言していない学生) も楽しかったと述べている者が見られたが、積極群は4つの全大学に見られた一方、消極群は1つの大学の1発言にとどまった。

〈ケースメソッド教育による学び〉は5つのサブカテゴリーから成り、[実践力向上への期待][具体的な学び][対応への自信]については、積極群・消極群両方ともに述べた者がいた。しかし、[養護教諭の職務を実感][授業後の学習の広がり]については、積極群のA大学にのみ多数見られた。

〈ケースメソッド教育の方法論〉は、5つの[サブカテゴリー]より成り立っていた。[グループ討論の利点][司会者による刺激]については、A大学で両群共に述べている者が見られた。さらに[全体討論による視野や考え方の広がり]は積極群 (A～D大学) のみならず、消極群でもすべての大学 (A～C大学) で肯定的意見としてあげられていた。

表2 ケースメソッド教育参加による肯定的意見

〈カテゴリー〉	[サブカテゴリー]	代表的な“コード”	
		積 極 群	消 極 群
討論の楽しさ	討論の楽しさ	授業形態がおもしろく、単純に楽しかった (A大学3, B大学1, C大学1, D大学1)	授業形態がおもしろく、単純に楽しかった (B大学1)
ケースメソッド教育による学び	実践力向上への期待	実践的な授業で力が付きそう (A大学1, B大学1, C大学4, D大学2)	具体的なケースまでイメージがわきやすく、力が付きそう (A大学2, B大学1)
		持っている知識を、どの場面で使うかの訓練になる (B大学1)	ケースの結末によって、展開が違うだろうということが理解でき、思考が広がる (B大学1, C大学1)
		場面設定があるので、自分で真剣に考える力がつき、知識が定着する (A大学1, B大学1, D大学1)	
	具体的な学び (事前対応・引き継ぎ)	インフルエンザでは、事前対応が重要であることがわかった (A大学3, B大学1, D大学1)	インフルエンザでは、事前対応が重要であることがわかった (A大学2, B大学1, C大学1)
		前任者からの引き継ぎの大切さがわかった (A大学1,)	
	対応への自信	ケースを模擬体験することによって、考えの選択肢が広まり、行動できるように感じる (C大学1, D大学1)	ケースを模擬体験しているの、少しは対応できそうに感じる (A大学3, C大学1)
	養護教諭の職務を実感	養護教諭になることが現実的な形で捉えられる (A大学6)	
授業後の学習の広がり	このケースによって、他の場面でもインフルエンザについて話すきっかけになる (A大学3)		
	ケースを深く考えることで、それに関連するニュースも合わせて考えるようになる (A大学1)		
ケースメソッド教育の方法論	グループ討論の利点	グループでは会話のような感じで意見を言うことができる (A大学3, B大学1)	グループだと自分が言った意見に対して、即座に反応があるので、考えを整理しやすい (A大学1)
		グループ討論で賛同してもらって全体討論でも発言しやすくなる (A大学1)	グループ討論で自分の考えを深めることができ、全体討論で発言しやすくなる (A大学1)
	全体討論による視野や考え方の広がり	いろいろな意見を聞いたことで、多様な考え方ができるようになる (A大学2, B大学1, C大学1, D大学1)	自分では思いつかないような意見を聞いたことで、多様な考え方ができるようになる (A大学1, B大学1, C大学3)
		視野が広がる (A大学1, C大学1)	ロールプレイと違って意見に多様性があり、視点が広がる (A大学1, B大学1)
	全体討論時のコの字型のよさ		コの字型の形態だったので、みんなの顔が見れ、自分の意見を聞いてもらっているのがわかってよかった (A大学1)
	司会者による刺激	司会者が発現しやすい環境を作り、また意見を要約してくれるので発言しやすかった (A大学4)	一人一回以上の発言が決められていたので、一生懸命考えるので積極的になる (A大学1)
		一人一回以上の発言が決められていたので、発言を促されてよかった (A大学1)	
その他	新鮮な印象を受けた (A大学3, B大学1)	こういう授業は必要だと思った (A大学1)	
今後のケースメソッド教育への希望・期待	ケースメソッド教育再受講の希望	またケースメソッド教育をぜひ受けたい (A大学1, C大学1, D大学1)	ぜひ受けたい (A大学1, B大学1, C大学1)
		一つの授業として、15コマすべて定期的に受けたい (B大学1)	小人数 (3~4人) ならやりたい (A大学3)
	慣れることへの期待	ケースメソッドを重ねていくことで力が付きそう (A大学1, C大学1)	もう一回やれば慣れると思う (A大学1)
参加者の多様性への希望	他職種、他学部 (看護学部)、他大学の人もケースメソッドをやりたい (A大学2, C大学1)		

\*大学の後の数字は、各大学の発言数

また、〈今後のケースメソッド教育への希望・期待〉に関しては、積極群・消極群ともに受けたいという発言がすべての大学で見られた。

## 2. ケースメソッド教育参加の困難点

ケースメソッド教育参加の困難点では、〈ケースメソッド教育の方法・形態など〉〈ケースメソッド教育への抵抗感〉の2つの〈カテゴリー〉が抽出された(表3)。〈ケースメソッド教育の方法・形態など〉は4つの[サブカテゴリー]から成り、積極群・消極群の両群から“発言のタイミングのむずかしさ”、“発言しにくい”などの[全体討論での意見の出しにくさ]が上げられた。

〈ケースメソッド教育への抵抗感〉では積極群では“毎週はやりたくない”、消極群では“やりたくない”という者がA大学で存在した。

## 3. 事前学習について

事前学習は、〈学習態度〉〈学習内容〉〈事前学習の方法〉の3つの〈カテゴリー〉が抽出された(表4)。〈学習態度〉では消極群で事前学習が不十分だとケースメソッド授業を受けても効果が少ないと感じた[事前準備の重要性]や、[事前準備不足]により討論で多様な発言ができなかったと述べた者がいた。〈学習内容〉は[インフルエンザ全般]や[学級閉鎖基準][予防方法]など4つの[サブカテゴリー]から成っていた。〈事前学習の方法〉については、積極群では、消極群に比べ[教

科書・文献]を活用したと答えた発言が多く、さらに厚生労働省の[通達]、[ホームページ]以外に、積極群では[他の人に聞く]といった、知り合いの養護教諭や、病院の医師に直接たずねたり、友達と話し合ったりするなどの方法を言及している者が多かった。

## 4. ケースメソッド教育を受けての不安

ケースメソッド教育を受けての不安では、〈自身の将来に対する不安〉の〈カテゴリー〉が抽出された(表5)。〈自身の将来に対する不安〉は[対応の困難][対応の不安][同じ失敗][初任時の不安][その他]の5つの[サブカテゴリー]から成り立っていた。〈自身の将来に対する不安〉は積極群・消極群どちらにも見られたが[対応の困難]は積極群に多かった。

## IV. 考 察

ケースメソッド教育参加による肯定的意見に関しては、表2に示したように、〈ケースメソッド教育による学び〉のうち[実践力向上への期待][具体的な学び][対応への自信]について、さらに〈ケースメソッド教育の方法論〉のうち、[グループ討論の利点][司会者による刺激]について積極群のみならず、消極群にも見られた。加えて、[全体討論による視野や考え方の広がり]については積極群・消極群のすべての大学であげられていた。これらから消極群であっても、多くの学びがあったことが

表3 ケースメソッド教育参加の困難点

〈カテゴリー〉	[サブカテゴリー]	代表的な“コード”	
		積 極 群	消 極 群
ケースメソッド教育の方法・形態など	グループ討論の意味が理解できない		グループ討論で意見をまとめるわけでもなく、討論の意味がわからなかった(A大学2)
	全体討論での意見の出しにくさ	挙手のタイミングが難しい(A大学1, D大学2)	発言のタイミングが難しく、挙手自体に慣れていない(A大学1, C大学2)
		何回も発言するのはいけないような気がして、遠慮した。もっと発言したかった(A大学1, C大学1)	言いたいことを他の人に言われて、発言できなかった(A大学1, C大学1)
		いつも同じ人が最初に発言するので、意見を言いにくかった(C大学1)	少人数では発言しやすいが、全体となると恥ずかしく、発言しにくい感じがした(A大学2, C大学2)
		グループだと話しやすいが、全体では発表できない人もあると思う(B大学1)	みんなが発言しているので自分は発言しなくてもいいかと受身になった(A大学1)
	全体討論のコの字型の問題点	コの字型だったので、顔の見えない人がいてやりにくかったので、座り方が丸い方がよかった(D大学1)	
時間不足	もっと討論したかったのに、時間が足りなかった(A大学4, B大学1, C大学1, D大学1)	もっと討論したかったのに、時間が足りなかった(B大学1)	
ケースメソッド教育への抵抗感	ケースメソッド教育へ抵抗感	終わった後の疲労感が強く、毎週はやりたくない(A大学2)	このような授業形態は慣れないので、やりたくない(A大学2)

\*大学の後の数字は、各大学の発言数

表4 事前学習

〈カテゴリー〉	[サブカテゴリー]	代表的な“コード”	
		積極群	消極群
学習態度	意欲的な取り組み	調べたり、考えたりした（A大学1， B大学1）	調べた（C大学2）
	事前準備の重要性		事前学習が不十分だと、ケースメソッドの授業を受けても効果が少ないと感じた（A大学1）
	事前準備の大変さ	学級閉鎖の基準などの対応は答えがひとつではなく、準備が大変だった（A大学2）	ケースに合わせての勉強は応用編なので、準備が大変だった（A大学1）
	事前準備不足		十分な準備ができず、討論で多様な発言ができなかった（B大学1）
学習内容	インフルエンザ全般	インフルエンザの特徴や診断、病院の状況、予防接種など（C大学1）	インフルエンザ全般（A大学1， B大学1）
	学級閉鎖基準	学級閉鎖基準（A大学1）	
	予防方法		予防方法（A大学1）
	ケースメソッド		「ケースメソッド」という言葉から調べた（A大学1）
事前学習の方法	教科書・文献	教科書や文献など（A大学1， B大学1， D大学1）	緊急対応マニュアルなど（A大学1）
	通達	厚生労働省の通達（A大学1）	厚生労働省の通達（C大学1）
	ホームページ	インフルエンザ関連のホームページ（B大学1， D大学1）。教育委員会のホームページ（C大学1）	インフルエンザ関連のホームページ（A大学1， C大学1）
	他の人に聞く	友だち同士で調べたことを元に話し合った（C大学1， D大学1）	
		知り合いの養護教諭に質問した（B大学1）	
臨床実習中だったので病院の医師に質問した（C大学1）			

\*大学の後の数字は、各大学の発言数

表5 ケースメソッド教育を受けての不安

〈カテゴリー〉	[サブカテゴリー]	代表的な“コード”	
		積極群	消極群
自身の将来に対する不安	対応の困難	実際に実行するのが難しそう（A大学3），対応できるかどうか分からない（D大学1），集団感染になるとパニックになる（B大学1），学校という組織でどう動けるかわからない（A大学1）	対応できるか分からない（C大学1）
	対応の不安	不安に思うことがある（A大学1， C大学1）	すぐに現場にでるのは不安（A大学1， B大学1）
	同じ失敗	実際自分でも養護教諭小林のように12月から始めるかも（A大学2）	自分も同じような対応をしてしまいそう（A大学1， B大学1）
	初任時の不安	初任で頭が回るか（A大学1）	初任だったらどの程度自分が率先して、対応していくべきか分からない（A大学1）
	その他	やるが多すぎて焦る（A大学1）	みんなで考えたことを現場では一人で考えなければいけない（A大学1）

\*大学の後の数字は、各大学の発言数

明らかとなった。また、〈今後のケースメソッド教育への希望・期待〉に関しては、積極群・消極群ともに受けてほしいという発言が多く見られたことから、消極群であっても必ずしも、ケースメソッド教育に拒否的であったわけではなく、多くの学びがあったことが示されたと言える。

一方、ケースメソッド教育参加の困難点を配慮する必要もある。すでに報告した直後の記述式調査<sup>9)</sup>でも、積極的に参加できたかという質問に対し、肯定的回答（そう思う、ややそう思う）と回答した者は、全体の72.6%であった。また、直後調査の自由記述でも発言できない要因として、手を挙げるタイミングのむずかしさ、発言しようかしまいか悩んだ、間違っていることをいっているのではないかと心配になり緊張したなどが見られた<sup>9)</sup>。

今回のインタビュー調査でも、ケースメソッド教育参加の困難点として、〈ケースメソッド教育の方法・形態など〉で“発言のタイミングのむずかしさ”，“発言しにくい”などの[全体討論での意見の出しにくさ]が積極群・消極群ともに見られたが、その意見は消極群で多かった。

しかしながら消極群では“発言のタイミングが難しく、挙手に慣れていない”という技術的なことも要因にあるが、その他、事前学習の不十分さが関係していると考えられる。

事前学習（表4）では、〈学習態度〉で、消極群では事前学習が不十分だとケースメソッド授業を受けても効果が少ないといった[事前準備の重要性]や、[事前準備不足]を述べた者がいたことから、討論に積極的になれるかどうかは、事前学習の影響も大きいことが示唆された。また、〈事前学習の方法〉については、積極群では、消極群に比べ[教科書・文献]を活用したと答えた人が多く、さらに[他の人に聞く]といった、知り合いの養護教諭や、病院の医師に直接たずねたり、友達と話し合ったりするなどの方法を述べている発言が多かったことから、これらの者は現場に即した対応などを直接専門職に聞くことで、現実的な対応策などの知識を持って、ディスカッションに臨んでいるものと考えられた。

一方、消極群では表3〈ケースメソッド教育の方法・形態など〉の[全体討論での意見の出しにくさ]が積極群に比べ多く、発言の機会を逸してしまった可能性がある。消極群では“事前学習が不十分だとケースメソッド教育の効果が少ない”と感じており、ケースに即した発言ができるまでの事前準備を行っておくことが活発な討論、能力の向上につながると考えられた。

また、〈ケースメソッド教育への抵抗感〉では積極群・消極群ともに“毎週はやりたくない”，“やりたくない”という者が存在した。慣れないということも配慮し、ケースメソッド教育の導入の頻度は、対象者の状況により検討を要すると考えられる。

さらにケースメソッド教育を行っての不安（表5）では〈自身の将来に対する不安〉で[対応の困難]に言及している発言が積極群で多かった。より学びが深かったからこその不安とも考えられ、これらの積み重ねが将来への対応力に繋がり、不安を徐々に払拭できるということを受け止められるような働きかけも重要であろう。

## V. 結 論

積極群のみならず消極群においても[全体討論による視野や考え方の広がり]など、かなりの学びがあり、また、〈今後のケースメソッド教育への希望・期待〉に関しても、両群ともに受けてほしいという発言が多く見られたことから、消極群であってもケースメソッド教育に拒否的であったわけではないことが示されたと言える。

一方、事前学習では、〈学習態度〉で、積極群に[意欲的な取り組み]を発言した人が多く、反対に消極群では事前学習が不十分だとケースメソッド授業を受けても効果が少ないといった[事前準備の重要性]や[事前準備不足]を述べた者がいたことから、ディスカッションに積極的になれるかどうかは、事前学習の影響も大きいことが示唆された。また、〈事前学習の方法〉については、積極群では、消極群に比べ[教科書・文献]を活用したと答えた人が多く、さらに[他の人に聞く]といった、知り合いの養護教諭や、病院の医師に直接たずねたり、友達と話し合ったりするなどの方法を言及している者がいた人が多かったことから、以上より、事前学習をどの程度するかによってケースメソッド教育の効果が異なるものと考えられる。特に、その場での対応など、場面に即した学習をしている場合には全体討論でも活発に発言でき、効果、満足度も高いと考えられた。

## 謝 辞

本研究にあたり、日本教育大学協会より平成21年研究助成を受けた。また、本研究にご協力いただきました、竹内伸一先生、鶴沢京子先生、ならびに学生の皆様に深く御礼申し上げます。

## 文 献

- 1) 岡田加奈子 (2011)：ケースメソッド教育とは、教師のためのケースメソッド教育。少年写真新聞社、10-14、東京
- 2) 岡田加奈子、竹鼻ゆかり、斉藤千景、佐藤百合子 (2007)：ケースメソッド、日本養護教諭教育学会第15回学術集会抄録集、29-30。
- 3) 岡田加奈子、竹鼻ゆかり他 (2009)：教員研修におけるケースメソッド教育の直後評価—研修受講者350名を対象とした質問紙調査、千葉大学教育学部研究紀要、58、203-210。
- 4) 竹鼻ゆかり、岡田加奈子、鎌塚優子 (2006)：養護教諭の問題解決に必要な視点と情報—ケースメソッドを用いた健康相談活動の展開—、日本養護教諭教育学会 第14回学術集会抄録集、76-77。
- 5) 竹鼻ゆかり、岡田加奈子 (2007)：ケースメソッド教育—事例のグループ討議による課題発見・解決学習—日本健康相談活動学会 第三回学術集会抄録集、97-98。
- 6) 竹鼻ゆかり、岡田加奈子 (2007)：ケースメソッドを用いた健康相談活動の展開—ケース及びチューターノート作成の留意点と課題、日本健康相談活動学会

第三回学術集会抄録集, 58-59.

- 7) 竹鼻ゆかり, 岡田加奈子他 (2007): 養護教諭の問題解決に必要な視点と情報の明確化—ケースメソッドを用いた健康相談活動の展開—, 日本健康相談活動学会誌, 2(1), 38-49.
- 8) 竹鼻ゆかり, 岡田加奈子他 (2008): ケースメソッド教育—事例のグループ討議による課題発見・解決学習—, 日本養護教諭教育学会誌, 11(1), 97-99.
- 9) 岡田加奈子, 竹鼻ゆかり他 (2011): 学部教育における総合的教員実践力の保証をめざすケースメソッド教育モデル教材の開発と評価, 日本教育大学協会研究年報, 29, 249-262.
- 10) ケースメソッド教育カリキュラム開発プロジェクトチーム: 代表 岡田加奈子 (2009): 平成20年度 教員研修モデルカリキュラム開発プログラム報告書 (教育課題研修), 教員のためのケースメソッド教育 事故・組織解決力育成のためのケースメソッド教育, 千葉大学教育学部ケースメソッド教育カリキュラム開発プロジェクトチーム, 千葉.
- 11) 鶴澤京子 (2011): 修学旅行, インフルエンザ発生, 教師のためのケースメソッド教育, 169-178, 少年写真新聞社, 東京.